道具としての言語＝言語としての道具：もう一つのサマリートーク

Language as Tool/Tool of Language: As an Additional Concluding Remark

是永　　論

はじめに

1995年の札幌学院大学社会情報学部への赴任は，自身にとって，専任の研究者としてのみならず，それまでは非常勤講師の経験さえもほとんどなかったことから，教育者としてもまさしくキャリアの第一歩目であった．このたびの学部開設25年に際して，万感が去来する中，徒然に書き始めていることから，本稿が「研究を振り返る」という特集ジャンルの構成の中で展開されながらも，硬軟のみならず公私が入り交じったものになることをあらかじめお断りしておきたい．タイトルもまた，実際に本誌6号1巻にも記録が掲載されている，在職当時におそらく初めて担当した学部業務でもある「第6回　社会と情報に関するシンポジウム」での「サマリートーク」(是永，1996)に由来するものであるが，当時の講師の方々の発表内容や自身の話した内容とはほとんど関係せず，むしろ社会情報学部における自身の営みに対する「サマリートーク」としていることも合わせてご了解いただきたい．

とはいえ，まずは「研究」に関連した話からすれば，自身が現在展開している（昨年度には学位も取得した）研究は「エスノメソドロジー」と呼ばれる領域に属する．研究分野としてはいちおう「社会学」に該当するものの，これから述べる領域の特徴から，そのような区分自体にはあまり意味がないともいえる．というのは，エスノメソドロジーが，社会を理解するという目的において，本来として「社会学者」という立場そのものを棄却する条件をその中に備えているからである．それはつまり，社会において人々が当事者（メンバー）として理解を行う方法（エスノメソッド）そのままに社会を理解することを本位とする一方で，それ以外の「社会学者」としての理解を認めないことを意味する．

一見このような立場は，ある「知識階層」のような社会的地位からの，いわば「上から目線」を慎むという，脱権力的な志向としてとらえられることがあるが，この点は後で述べる内容に多少関わるものの，エスノメソドロジーにとって本来的なものではない．そして，考察の対象となる「理解」もまた，そもそも当事者の理解に対する研究者による（高度な）理解，といった階層を構成するべくもないもの（たとえば（会話の中身ではなく）「いま誰かと会話をしている」ことそのものについての理解など）である以上，そもそも何か隠された事実を解明する者としての「研究者」による営みとはとらえがたいものに映ることがある．

といっても，決して「研究」という営みそのものを否定するものではなく（他方で自身は今に至るまで決して勤勉に研究する者であるとは言いがたいものの），本特集の「社会情報学部における研究を振り返る」という狙い

Korenaga Ron　立教大学社会学部
（社会情報学部在籍1995年4月～1999年9月）

に即して，むしろ，なぜ「社会学者」としての「研究者」であることが自身の考察において否定され，そのような考察について何が「研究」となり得るのか，さらに言えば，自分がいったい何をやってきたのか，そしてどこに向かうのか，ということを本学部における経験になぞらえて反省的に考えていこう，というのが本稿のとりあえずの目的である．ちなみに，エスノメソドロジーには「自己省察」（Francis & Hester, 2004＝2014）という研究方法があるが，まさにそのようなものとして，いまここで徒然なるままに文章を連ねることもまた，「研究」としての営みをなすものである（と言っておかないと，真面目にやってないとも思われそうなので）．

言語使用の相対化

これまでに示してきた，「研究者としてではなく研究をする」という営みは，それではいったいどのようにして可能になるのか？　ここではそれに対して，①言語使用の相対化および②使用場面の観察という，エスノメソドロジーの主な研究方法に由来しながら，特に本学部時代の自らによる実践（失敗も含む）になぞらえて述べていく．

私が（ここから自身を「私」と表記とする）社会情報学部に最も特徴を感じていたのは，当然ながらその学際性である．といっても，本学部に展開する量子力学から人工知能までにいたる学問分野それぞれに深く根ざしてその特徴を意識していたかといえば，全くそうではなく，私には「文系」に対する「理系」という以上の区分をもってその学際性を理解する以上の能力はなかった．その一方で，本学部では各教員が自らの研究内容を紹介する機会が多くあったため，表面的なプロフィール以上にそれぞれの方が「理系」という分野において何をなさっているのかに，具体的な言語使用の場面を通じて触れることができた．

しかしそれもまた，あくまで「触れる」というもので決して理解と呼べるレベルではなかったが，少なくともどのように研究を言語化するのかという場面においては，自分が「文系」としてやってきた方法とは明らかに違うものを目にしているという意識はあった．つまり，「文系」ではレジュメにより「読ませる」ことが中心であったのに対して，「理系」では主にスライドによって「見せる」ことによって研究を言語化しているというのが，浅薄の限りではあるが，その違いとして表現される．おそらくそこには，数式というもう一つの「文系」にない言語化の方法がこちらには通じないと予想されたために，できる限り「見せる」ものにしていたという「理系」の先生方の配慮があったものと思われるが，たとえそれだけの違いでも，私が自らの「研究者」としての言語使用を相対化するには十分だった．パワーポイントというソフトウェアが使われ始めたのもちょうどこの頃だったものの，1999年に本務校に赴任してからしばらくしても学生に使用を禁じる教員がいたほど，スライドのような言語形式は「文系」には遠い存在であり続けた．

この程度の話で学際性を論じられるのは，ある意味おめでたいともいえるが，少なくとも私による「理系の研究」という理解において，数式というありきたりな形ではなく，視覚的なデータ提示という形式を目のあたりにしたことが大きな意味をもっていたことは事実で，それは同時に，自らの研究を相対化するきっかけがそうした具体的な「言語」の使用においてもたらされていたことを意味する．翻って，「理系」すなわち「科学」としての認識そのものが，図示などの具体的な言語使用において産出されるという前提から展開したエスノメソドロジーの研究に，「ラボ研究（実験室のエスノグラフィー）」という分野があり，それが「（自然）科学」を一つの社会的な営みとして相対化して理解するための研究

である（Lynch, 1993＝2012 など）ことを知ったのはこの時期からしばらく経ったからであった．この時に，もしこうした研究への知識がもっとあれば，単なる「理系」として以上に，もっと深い形で先生方による「科学」研究としての営みへの理解を向けられたと考えると，後悔の念も生じてくるところだが，とにかくも，こうした「研究」への認識を相対化する場として本学部に就くことができたのは，私にとって非常に幸運なことであったのは間違いない．

ついでに記すならば，この時期に「理系」の先生方の導きにより Unix という「コンピュータ言語（基本ソフトのことだが，ここではあえてこのように表現する）」に接することができたのも，より広い意味での言語の相対化という点で非常に新鮮な体験であった．この言語の存在は，世の中を Windows が席巻しつつあった当時の状況自体を相対化するだけではなく，サーバー管理という社会的な行為と結びついたコンピュータ言語の意味を認めるきっかけにもなり，このことは，後に大きく展開したインターネットがもつ社会的な意味への認識をある意味で正しく形成するのに役立った．より実利的には，つい最近も Mac で書き込まれた研究用の映像データを Windows で読み込むのに難渋していたところ，Linux（Ubuntu）を使って簡単に転送できることがわかり，そのご利益を感じたところである（といってもコマンド操作自体はほとんど身についていないのだが）．

さらに当時（ある意味今でも），自らの「研究者」としての言語使用の相対化を認識させる経験として，次に挙げられるのが，授業などを通した学部学生との対話である．本学部で初めて担当したゼミで購読したのは当時から傾倒していたE・ゴフマンの『行為と演技』（Goffman, 1959＝1980）であったが，このタイトルを初めて目にした時の学生たちの話は，この意味で非常に深く印象に刻まれている．それは，この言葉がいわゆる「エッチな意味」を持っている，というものだった（具体的な意味はご想像にお任せします）．雑談とはいえ，授業のさなかに出された発言としては，普通なら怒ってもよい類のものかもしれないが，私はこの言葉がそのように理解されることにそこで初めて気がつくとともに，素直にそうか，と納得もした（だから今でも覚えている）．

なぜなら，実際のところ，日常で私たちが「行為」などと口にすることは，逆にそういう場面でもなければ一般には珍しい経験であり，そもそも日常における何らかの営みを単独の「行為」として切り取って考察すること自体が，ただ「研究者」によるそのような言語使用によって形作られたものに過ぎないともいえるからだ．このように述べたとしても，何らかの「行為」を考察する意義は否定するべくもないが，そうした「研究者」による前提が日常における人々の理解に直接結びつくことは，少なくともそう簡単に保証されるものではない．ここでゴフマンの名誉のためにも述べておけば，この邦題は原題の〝The presentation of self in everyday life〟とは全く関係のないものであり，「日常生活」という言葉の消失（正確にはサブタイトルへの格下げ）とともに，この訳語は当時からの「社会学者」の理解がいかに日常の言語使用場面から乖離した次元でなされていたかを示すものであったともいえる．一方で，この学生たちの言葉による理解は，ゴフマン自身が別の著作で〝sexual moan〟の相互行為上の意味を考察の対象としていたことから，ある意味で正鵠を射ていたともいえる．

ところで，今でも手元に残る当時の学部内「社会系スタッフ会議」のレジュメ（1998 年 7 月 31 日付）によれば，学力や一般知識といったものより，「研究者」としての言語運用能力が身についてないことが，学生たちがなかなか大学（カリキュラム）での必要に応じて活

動してくれないことの原因ではないか，ということを私は主張していた．このような認識は，今にして思えば，言語運用の問題としては半分納得できるものの，もう半分は納得できるものではない．後者の理由は，あくまで「研究者」が本位であって，学生自身による日常的な言語使用への視点がほとんどないことによる．ここでもついでに述べれば，私は在職当時，学力が根本的な問題であるために，学生が学部において必要とされる活動ができていないと思ったことはほとんどなかった．逆に現在までに首都圏での相当の学力レベルとされる大学でいくつか教えて来ていても，特に講義形式の場合，学習内容について質問はおろか簡単な感想を話してくる学生さえも年に数えるほどしかいないという経験からすれば，本学部の学生は，日常的に言語を運用するという能力にはむしろ長けていたような印象さえある．授業における反応なども非常にストレートな言葉使いで，逆にそれ自体が自らの「研究者」としての屈折した言語運用を反省させる機会になったことも少なくない（それがこれまでに大きく改善されてきたとは決して言えないのが残念だが）．

その一方で，現在の学生に見られるような対話機会の貧困は，社会全体の機械化・マニュアル化の中で，学生自身にとって言語を自然に運用する機会が学外の生活でも急激に減少していることをうかがわせるとともに，そのような貧困に対する，大学内での「研究者」による言語の優位（ある意味近年の英語信仰もこれに該当する）を揺るぎないものとする中で，双方における隔絶を悪循環的に拡大する可能性をもつ．

ところで，こうした「研究者」の批判はとかく「象牙の塔」の権力性に対する批判のように取られがちだが，そのような批判と，「研究」が特定の言語使用をともなう独立した営みとなっていることはまた別の問題である．ある意味で，サーバーの管理に Unix が，調査データの解析に SPSS（当時は SAS だったが）が必要であることに近い形で，専門の作業において専門の言語が道具として使用されることを批判しても仕方がない．また，ある営みについて人々がとり結ぶ関係の一つに「研究者」というものがあるのならば，そうした存在が社会において認識されること自体は否定しようがない．しかしながら，社会学においてやはりそれが問題であると言わなければならないのは，社会学が本来考察の対象としている「社会」についての理解は，まさにその「社会」にいる当事者の言語によってなされているはずであるからだ．「研究者」という認識はこのとき，そのような個別の「社会」を離れた「絶対的な」立場として，そこにおける人々による具体的な言語使用の営みとの乖離を生じることに対して無自覚にしてしまう．

したがって，特にエスノメソドロジーの観点から必要なことは，単なる「研究者」という存在の批判ではなく，研究という営みを，そこにおける言語使用という観点から相対化することになる．そして，その一つの手がかりは「社会を調査する」という営みの中に求められる．これまでに本誌『社会情報』に執筆した研究上の論考としては唯一のものになってしまった拙稿「マス・コミュニケーション研究とデータ管理：認知的道具としての調査票の意味」（是永，2003）は，そうした観点から，「調査票」を作成しまたそれに基づいて調査対象者と応答するといった具体的な言語運用の場について検討する試みであった．この試みはもともと後に「社会調査史」（佐藤，2011）として展開することになった，専門知としての社会調査の相対化を企図する佐藤健二氏の論考（2001 年の「第 11 回社会と情報に関するシンポジウム」での講演（佐藤，2001）が同書のきっかけとなっているという）に触発されたものであったが，こうした背景として本学部の「社会・意識調査データベース

(SORD)」に異動後も続けて関わる機会をいただいたことは貴重な経験であった．

しかしながら，ここでそろそろ問われてきそうなのは，以上のようなさまざまな形での相対化の一方で，肝心の自らの研究はどのような内容として展開し，そこでの私自身による言語運用はどうだったのか？という点である（つまりは本題に入ってなかったともいえる）．特に後者については，在職時にご一緒した方はよくご存じなように，そもそも言語能力とか，対話の貧困などと他人様にヌケヌケと言うのがはばかられるくらいに自分がいわゆる「口下手」であることは認めざるを得ないだろう．その疑問を含めて，以上については次の「言語使用場面の観察」において明らかにすることにしたい．

言語使用場面の観察

「研究者としてではなく研究する」というもう一つの方法には，「観察」するということがある．この方法はエスノメソドロジーにおいて「エスノグラフィー」と呼ばれる（是永，2013）が，その用語自体は「（参与）観察」と合わせて，従来の社会学においても用いられてきたものでもある．しかしそれらは，まさに「研究者」として行われている「観察」に過ぎない，ということにおいてエスノメソドロジーにおける「観察」とは全く異なる．

両者の違いは，エスノメソドロジーが，その主たる観察対象を「言語使用場面」に置くことに求められる．ここでエスノメソドロジーが本来として「会話分析」と結びつけられることを引き合いに出せば，理解しやすいだろう．ただし，そこで同時によく誤解されるように，エスノメソドロジーは「言語」そのものに関心があって観察を行うのではない．先に見たようなさまざまな「社会」の当事者による「使用場面」を対象として，そこでの専門性などを含む特定の理解がどのように「産出」（Francis & Hester, 2004＝2014）されるのかに一貫した関心を払っている．

これに対して，従来の社会学における観察は，「研究者」が行為の場面に参与することは強調されても，結局何を対象としているのかは必ずしも明確ではない．その問題は，これから述べるような，私自身が経験した観察上の悩みについて直接示されることになるが，少し先取りして考えるために，最近の社会学におけるビジュアル・データへの関心を例としてみよう．

安川によれば，社会学においては，学問として発足した当初から映像（ビジュアル・データ）が研究対象と見なされること自体が少なく，これは人類学が「映像人類学」のような分野を発達させてきたことと対照をなすという．それには社会学が「言葉の学問」（安川，2002）として画像を拒んで来た独自の脈絡がある一方で，近年の反動ともいえる関心の高さは，デジタル技術の発達により，映像の使用が社会一般の人々を含む研究者によって，非常に容易になったことに求められる．そうした状況的な要因によるビジュアル・データへの関心は，社会学者が本来何を基準に観察対象（データ）の範囲を定めているのかという疑問を生じさせるとともに，実際にデータに取り組む際において，画面上にある何をどう扱うかが確定できないという曖昧な状況をもたらす．その曖昧さは，しかしながら，単に映像やその背景にあるテクノロジーとの関係に起因するのではなく，結局のところ「観察」の動機が，ただ研究者自身の「関心」以上に確かなものをもたないことに求められる．

ここで少しずつ本題に戻れば，本学部への就任をきっかけに，これまでの「情報行動」を計量化する方法一辺倒からの脱却を（何となく）考えていた私においても，では何をデータとするのか，というのが実際よくわからないことが一番の問題となっていた．それでもとにかく「観察」をしなければ，ということ

で，佐藤郁哉氏の『フィールドワーク』(佐藤，1992)などを繰り返し読んだものの，「方法を組み合わせることに意味がある」，「細かく記録すればよいというわけではない」(ではどうすれば？）といった以上のことはつかめず，ただ同書の「書を持って街へ出よう」副題そのままに，フィールドワークという名のもと，まずは「街へ出よ」と自分に言い聞かせるほかはなかった．

以上をもって，すでに当時の私による「観察」の試みは失敗だったと結論づければそこで話は終わるのだが，ここで少し回想らしく，「街」で何をしていたのかを簡単に述べることにしよう（実際その佐藤氏も自分が失敗したフィールドワークの例を披歴している）．まず，当時江別市にあったプロバイダを自主運営する市民サークルの活動に参加したことは，大学院生時代に長野のケーブルテレビで番組の自主制作をしていた住民団体への聞き取りなどを経緯として，ひとえに研究を動機とするものであった．しかし，実際に後で身を置くことになったのは野幌の飲み屋街の方が圧倒的に多く，毎回の酩酊状態で観察も何もあったものではなかった．そのほかは，出身地でもある札幌の方に足を運んで「街に出る」のは造作もなく，すすきのは勿論のこと，夏といえば「聖地」の厚別（公園陸上競技場）で発足まもないコンサドーレに声援を送り，冬になれば上野幌の雪印スケートセンターでアイスホッケーをプレー・観戦したり，スノーボードで定山渓の山奥に分け入ったりと，確かに現在東京にいる身としては決してかなわない経験を味わったとはいうものの，まったく研究には関係がなかった．ただ，当時SORDの事務局にいらした池田ひろみさんのお誘いで，研究者以外のいろいろな方と「街」でご一緒できたのは，以上の経験だけであればきっと「口下手」はおろか「口無し」であったかもしれない自分の言語運用能力を多少なりとも高めることにはなったかと思う．

結局のところ，「街へ出る」ことで何か研究において劇的な出会いがある，というのはやはり物語の世界のような話であった，ということになる．そこであらためて，当時の自分が何をしたのが今になって一番良かったかといえば，それはやや逆説的だが，エスノメソドロジーの「研究者」を対象に観察を行ったことだ，といえるかもしれない．この点で，自分が着任してほぼ一年後に，水川喜文氏（現・北星学園大学教授）が札幌に赴任されてきたことは大きな転機であった．彼はこの分野が日本で知られるかなり前からボストンやマンチェスターにいる先端のエスノメソドロジー研究者のもとで資料を採集しながら研鑽を深めており，もちろん赴任前から「研究者」としての名前は知っていたものの，札幌に来なければここまで彼に近づく機会はなかったようにも思う．

彼は，一緒に専門書を翻訳したり，遠隔会議システムの共同研究に参加したりする一方で，スノーボードなど「街へ出る」仲間でもあって，公私にわたって彼を身近に「観察」することは，自分にとってエスノメソドロジーへの傾倒とその理解を深めるきっかけとなった．このように書くと何か一方的に利用しているようだが，彼の方もまた，私自身のやることなすことが一つの「観察対象」として面白い奴だと思ったらしく，実際にもよくそう言っていたので，お互いさまという感じでもあったろう．

彼をここで引き合いに出すのはある意味たとえのようなものであるが，実際のところ，私はエスノメソドロジーをガーフィンケルに代表される難解な書物との格闘によって習得したのでは到底なく，ただひたすら国の内外を問わず「研究者」の集まるところにビデオカメラを手に参上し，そこで交わされる言葉の端々（といっても英語には難儀したが）をとにかく観察することに終始したというの

が，私にとっての学習方法であり，かつ研究方法でもあった．その点では移動のための出張費を潤沢に提供いただいた札幌学院大学にもさることながら，後に留研先のマンチェスターを含む，さまざまな場面に足を運ぶことにおいて先達となった水川氏にあらためて感謝したい．

そして，研究者（エスノメソドロジスト）の実践する理解が，当事者により実践される理解をそのままに示すという前提において，エスノメソドロジーの研究における言語使用場面を観察することはそのまま，私にとって「社会」において何をどう観察するのかを理解する方法となった．教育学においては「正統的周辺参加（Lave & Wenger, 1991＝1993）」という学習方法が指摘されているが，そこで提示されているように，たとえ直接に言語を運用することがなくても（つまり口下手であっても），日常の言語使用場面を観察すること自体が学習の機会となるということは，すなわち観察する者がそのまま観察の対象者に統合されることを意味する．さらにエスノメソドロジーにおいては，エスノメソドロジストが研究対象となる「社会」における理解の実践者＝参与者そのものである以上，逆に現実として「街へ出る」ことがなくても，既存のエスノメソドロジストによるエスノグラフィーにおいて提示された言語使用場面を観察することが，そのまま「社会」を当事者として理解することにつながる．

この点は単なる研究上の理想ではなく，エスノメソドロジーによる研究知見が，そのまま当事者に還元されること（チュートリアル）においてその意義を問われるものである以上，必要不可欠なものであるといえる．これがすなわち，いわゆる社会学者といった，場面から乖離した「研究者」の立場からの観察ではなく，当事者による実践を観察によって学習するという意味での，「研究者としてではなく研究をする」方法となる．

同時に注意しなければならないのは，このような形での当事者としての「社会」への理解は，あくまで場面（の観察）に即したものであり，エスノメソドロジストが「街へ出る」つまり現実の場面に身を置くことの不要を示すものでは決してなく，逆に実際の場面に対する観察者（エスノグラファー）としての不断の注目を意識させることになるだろう．ただ，そのような現実的条件がなくても，当該の場面について実践されている理解は，言語の記録と観察を主とするエスノグラフィーによって，そこにいない他者にも共有することは可能であり，結果としてその他者にとっても，何をどのように観察するか，という観点は引き継がれることになる．ここでビジュアル・データの持つ意味に敷衍するのであれば，映像を研究に用いることは，場面観察の一手段であることは当然ながら，あくまで当事者が行っている言語使用場面を「そのまま」に提供する形で，学習および共有の手段となることは強調されてよいだろう．よく言われるように撮影アングルなどの関係から，映像は現実をそのまま映すものでも，現実そのままの観察を可能にするものでは到底あり得ない．しかしその一方で，場面の理解を共有するという意味においては，言語がそれ以外の要素（身振りや表情だけでなく身体どうしの空間的配置など）とともに，当事者にとって意味ある（レリバントな）理解が成立する過程を明らかにする点で，これ以上にない有効性をもつものともいえる（Banks, 2007＝2016，特に3章の拙訳を参照）．

結局のところ，研究のことについて考えるには，やはり研究に還るしかないという話で，エスノグラフィーの文献講読などによっても観察における観点だけは引き継げるとしても，その継承を実践するにはやはり自らも観察（研究）をするほかにはないことを意味する．この点で，私自身が断腸の思いで（大学の環境もさることながら，江別と札幌の街を

離れるのは何より辛かった),社会情報学部を去ることになったのも，場面（現場）の観察を旨とする以上，当地においてエスノメソドロジーとして研究することの限界を感じたからでもある．学びて思わざれば則ち罔し，とは言うが，書物は，他者の観点を引き継ぐことは無限な形で可能にするものの，結局はそれを引き継いだ自分がいま＝ここで実践する観察がなければ，まさにその観点を活かしたことにはならない．

私の場合，その実践を在職中にはとうとう果たすことができなかったが，後に行った住宅設備工事のエスノグラフィー（是永・五十嵐・水川，印刷中など）は，海外の研究者にも知られることとなり（Sakai, Korenaga, Mizukawa, Igarashi, 2015）多少なりとも，後の人々に観察を継承するきっかけを作ることにはなった．

おわりに

本稿において，いささか社会学者を排するような物の言い方が続いたことについては，もちろん当時の社会系スタッフの先生方を排するものではなく，むしろ，在職中の私が先生方に対して，社会学もしくは社会情報学の教育および研究についてさしたる貢献ができなかったことに対する反省とその申し開きから出ているものとして理解いただきたい．これまでに書いた内容との関連で，一人だけお名前を挙げさせていただければ，先に述べた研究者としての言語運用と，学生に向かう際の言語運用の相対性について考えることになったのは,当時の大國充彦先生のお考え（第46回社会情報学部研究会レジュメ報告「教育という事件との出会い」（大國, 1998 も参照））にも大きく影響を受けていた．当時から学生と同じ歩幅で漸進していくような大國先生のご指導の様子に感服しながらも，なかなか自分にはできないと思いつつ，その後現在のような対話の不在状況を身近に目のあたりにするにつけても，今後もその志を共にしたいと考えている．

行きがかり上のタイトルとはいえ，いちおう最後に引き取っておけば,「道具としての言語」については，エスノメソドロジーにおける観察上の「道具」として，言語およびその使用場面があることを示したと思われるが,「言語としての道具」という点は触れてこなかったように思う．そこで思い出すのは，本学部での採用審査の面接において，当時の学部長であった田中一先生が出された,「人間とは何か」という非常に根源的なご質問に対して，私が「言語を使う存在である」（大意）と答えたことである．といっても，本当に苦しまぎれの中で出た,その場しのぎのための「道具」のような発言であり，そのような意味でも未熟な自分をこの学部の一員に加えていただいたことに深く感謝を申しつつ，そこから「言語という道具」という解題＝改題をもって筆を擱くことにしたい．

参考文献

Banks, M. (2007) *Using Visual Data in Qualitative Research,* Sage＝(2016) 石黒広昭（監訳）『質的研究におけるビジュアルデータの使用』（SAGE 質的研究キット５），新曜社

Francis, D. and Hester, S. (2004) *An Invitation to Ethnomethodology*, Sage＝(2014) 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根（訳）『エスノメソドロジーへの招待』，ナカニシヤ出版

Goffman, E. (1959) *The Presentation of Self in Everyday Life*, Doubleday&Company＝(1980) 石黒毅（訳）『行為と演技：日常生活における自己呈示』，誠信書房

是永論（1996）「サマリートーク」,『社会情報』Vol. 6, No.1：103-107

是永論（2003）「マス・コミュニケーション研究とデータ管理：認知的道具としての調査票の意味」,『社会情報』Vol.12, No.1：151-159

是永論（2013）「人々における経験に根ざした「情

報」へのアプローチ―エスノメソドロジーに特徴づけられたエスノグラフィー」，『社会情報学』，vol.1　No.3：1-9

是永論・五十嵐素子・水川喜文（印刷中）「遠隔作業における知識の非対称性をめぐって ── 配管工事現場のエスノグラフィーから」，水川喜文・秋谷直矩・五十嵐素子編『ワークプレイス・スタディーズ ── はたらくことのエスノメソドロジー』，ハーベスト社

Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate peripheral participation*, Cambridge University Press＝(1993)佐伯胖『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』，産業図書

Lynch, M. (1993) *Scientific Practice and Ordinary Action*, Cambridge University Press＝(2012)　水川喜文・中村和生（監訳）『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』，勁草書房

大國充彦（1998）「教育という事件との出会い」，『現代社会学研究』Vol.11：139-140

Sakai, S., Korenaga, R., Mizukawa, Y. and Igarashi, M. (2015) “Envisioning the Plan in Interaction: Configuring pipes during a plumber’s meeting”, in M.Nevil et al. (eds.) *Interacting with Objects: Language, materiality and social activity*, John Benjamins.: 339-356

佐藤郁哉（1992）『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』（ワードマップ），新曜社

佐藤健二（2011）『社会調査史のリテラシー：方法を読む社会学的想像力』，新曜社

安川一（2002）「〝視覚的なもの〟と向きあう：視覚社会学のために」，『視覚メディアにおけるジェンダー・ディスプレイのミクロ社会学的分析』（共著：安川一，前田泰樹，杉山由佳）一橋大学大学院社会学研究科安川一研究室【1999-01 年度科学研究費補助金研究成果報告書】：1-31
（URL：http://ofc-hjm.misc.hit-u.ac.jp/hjm/MyDesk/Bib/2002b.html　2016 年 11 月 30 日確認）